

る、それゆゑに夫等の競争を今少し品好くしたく
謂ゆる君子の争といふまで無く、ともそれに近
いものにした、それに此競争も一個々々で無く
之を擴めて一群または一團となつた大いなるもの
にして利用したのである。

▲脳髓と人の賢愚

(醫學士 渡邊房吉氏)

脳髓の輕重大小は動物の賢愚利鈍を判別する一の根據
となり、諸動物に一般に其頭腦が人よりは輕小なる故に
知識が人に及ばないといふ事に歸着し、動物中にては腦
の發達せるものは發達せざる者より賢いといふ事になる
人間でも一定度迄は此原則が適用せらる。解剖學上から
腦量が平均成人男子千三百七十五瓦女子千二百四十五瓦
ある。但男女腦量の相違は先天的である。年齢に就ても
二十歳より三十四歳迄の間が最重く、五十の坂を越すと
漸次減少する。又文化の度が腦量に關係する。古今の名
士に就いて見るも腦の重いものは偉い様である。併し又
他の統計は之を打破るべき事實を示して居る。乃で賢愚
の別は腦重以外其表面の皮質大小に關係するといふので
ある。即腦廻轉の多少に依るのである。

父兄に對する希望

如 柳 子

(1) 小供は貴い可愛いものであります。
他人の子供でさへこれを見ると誠に可愛いもので
その天真爛漫の状態、言ふに言はれぬ貴いところ
があるのでござぬます。實に白金も黄金も到底に
子供に及ばない。ましてそれが自分の子供であつ
て見ればどれ程可愛かどれ程貴いか。どうも子供
が多くて困るといふのは間違で、内の中には千兩
箱が二つも四つもころがつてゐると思ふて宜しい
のであります。ほんとうに千兩作る人になるか万
兩作る人になるか知れたものではない。

(2) 教育せねばならぬ。
子供は可愛いものである貴いものであるといふて、
頭から丸めて賞めて居るだけでは決して千兩作る
人になつて呉れない。否善い人になつて呉れない
養つて教へざるは父の過教へて嚴ならざるは師の
過といふてある、可愛い子には旅といふこともあ

る、何れも教育の大切なことをいふたので、茲では師の過の方はいふに及ばぬが、生れた儘で、丸めて賞めて育て、もよい人にはなれぬ。人には自然慾といふものがある教育して此の慾をよい加減に整理せねば決してよい人になれぬのである。

(3)さらば教育する方法は

子供は教育せねばならぬことは解つて居るとしてさて如何に教育するか、其の喩に親から子から師匠からといふことがある、此の三つが揃はねばならぬ、そして其の歩調を一にせねばならぬ。此の中に師匠からといふ方は言はぬ、又子からといふ方は多少關係があるが、今日は一般に中等の性質のものとして御話する。而して親からの方は今日御話する重要な點である。即ち父兄方に心得て頂きたいことをいふのである。

(4)如何なものにしやうとするか

世の中でエライ人といふのは、必しも楠正成や東郷大將や下田歌子さんばかりじやない、成程此の人達はエラクないとはいはぬ、然しこれは十万人中の一人で、普通の人の望むべきことでない、然

るに世間にはエライ人になれ、東郷さんのやうになれと望む父兄がある。能く其の人柄を考へねばならぬ、又家柄身柄を考へねばならぬ、一口に柄にないををするなどいふ。これが肝心な點である、その上エライ人といふのは何も軍人や、歌人や、政治家にあるばかりではない、豆腐屋にでも魚屋にでもエライ人はある世の中に名前の出た人ばかりが英雄じやない。一生名を出さぬ人も眞面目で無事に暮して行くことが出来れば、それでよいそれが最早エライのである。であるから悪いことをせぬ善い人になれと勧めるのはよい、何も世間でいふエライ者になれと勧めるには當らぬ。其の程にはけて一方には祖先の業を継ぎ、一方には子孫に其の業を譲る、それ程の名もなく、それ程の金がなくとも日々正直に怠りなく自分の職業を盡くして行くのは或る者は平凡といふだらう、然もこれが一方からいふ英雄なのである。一個のエライ人である。世の中は四月八月常月で借りす借さずに子供三人といふ歌がある、一文も借りずに暮せれば何とエライ人ではないか、少し六かしい

が天爵を貴ぶやうにならねばならぬ。

(5) 無暗に叱るな

子供の爲る仕事や、いたづらの中には、非常な眞理が含まれて居る。將來の職業なども此の中から

見出す例が幾らもある。されば無暗に叱る譯には

行かぬのである。實際世間では親が子供を遇する

に度々叱るやうであるが、自分の考ては、叱るこ

とは大概の場合に不必要である。可愛くは五つ教

へて三つ褒め二つ叱りて育てよや人といふ歌のあ

る通り、教へて置いて餘計褒めるといふ風の取り方

でなければならぬ。自分の忙しいのや面倒の爲め

に教へることをせずに叱りてばかり居るのは、其

の子供を卑屈にするもので、益々叱れば益々言ふ

ことをさかぬ様になる。可成叱らぬやうにして欲

しいものである

(6) 親の機嫌を中心とせぬこと

世の中には子供といふことを忘れて、親自身の快

不快によりて子供を褒貶する。尤もよくないこと

である。これは第一親を信用しないやうになる。

例へば親が思つた通り金利けをして心中愉快であ

る、自分は嬉しい嬉しい爲めに悪い事をして叱

らぬ、時には却て興がることもある。之に反して

自分に不快のことがあれば、それ程もなきことを

叱り、善いことをしても賞めぬ。之は眞に子を愛

するもの、爲るべきことでない、子供を教育する

には子供を中心とせねばならぬ。

(7) 物事の不足に對しての注意

甲の生徒の衣食や持ちものを乙の生徒は羨む。殊

に女兒に多い、これは經濟上の事情で買つて與へ

られぬ場合もある。其の時に乙の子供は非凡な人

間であらぬ以上は、必ず自分の家は貧しいから買

つて貰へぬと悲觀し、随つて甲には頭が上らぬ、

肩身が狭いと感ずる様になる、随つて卑屈になる。

これは誠に厭ふべきことであるが、これは一方經

濟的事情と關係するから頗る六かしい。親も買つ

て遣りたきは山々なるも不如意の爲めに出來ぬと

いふ場合には、十分時間を費す積りで靜かに柔か

に能く分る様に諭してやる。禮は重しきに從ふも

ので家の貧福の程度によるべきで、着物持ち物に

よりて人間に甲乙はないものであるといふことを

曉らせ、且つ人間の貴い所は其の人品にあるので之を包む衣裳や持ちものにはないといふことを呉を諭し、また父兄自身も決して衣服持ちものを恥るやうな様子を見せないものである。そして却て反對に不義の富貴は浮べる富といふことも例擧して教へてやるのである。併し、何時までも善き衣服は着られぬと決めるのも亦よろしくない、漸次家運を進めて行くといふことは勧めねばならぬことである。

(8) 其の日暮しの品性を表すべからざること世間には一日の利益は一日に費す、所謂宵越しの金を持たぬといふ古い俠客風の悪習慣が労働社會や一部の商人にある。例へば今日これは餘分の利益があつたとすれば、それで飲食する物見遊山をする。一時に其の金を失つて骨休めであるかの如くに考へて喜ぶものがある。中には妻君が節約者であり、良人が節約者であつたりして、互に費すまいと心掛ける向きも勿論あらうが、そんなこと言はずに、たまには骨休めもしなくてはいけないと勧められると、渴して居るときであるから慾

の方が勝つて、遂に賛成してしまふこともある。これは兒童教育上弊害のあることで、これを見た耳聞たりする兒童は、それをよいことの様に心得、不知不識それを真似るやうになる。この一時的に費す金の小部分を割いて貯蓄することも出来れば、少部分で精神上の愉快を買ふことも出来る。斯かる場合には殊更に貯蓄心を示す必要があると思ふ。

(9) 勤儉の風を養ふべきこと前に反して一錢でも餘計なものは貯へ置くといふことにすれば、之を見聞する子供は不知不識貯金の面白味を曉つてくるやうになる、勿論學校によつては貯金をさせて居るところもある。私の學校でも、先年尋常科が四年で卒業の當時、青木といふ女の子が五拾圓の貯金をしたことがある。五拾圓と思つて見れば大したものであるが一年目には十二圓五十錢、一ヶ月には一圓四錢、一日には三錢五厘の割である。そして此の貯金した子供の家庭は車夫である。確かに世にいふ其の日暮しである、其の日暮しであつても、子供に貯金させるこ



とを樂しみとした所謂前の僅かの金でも精神上の樂しみを貰へるといふことに當る。されば其心掛一つである、世に金を貯へるといふことのある大半は利けるといふよりは遣はぬといふことにあるので、西洋の諺にも大利を思はんより小費を省くに如かずとある。此の如きことを子供に見聞させるやうにすれば、子供は知らず、勤儉の風に化するのである。近來一般に奢侈に流れて然も一攫千金の考をするもの、山師的商賈で利けようとするものが出來たのを慨かせられて、先般勤儉の詔勅が下つた。これを思ふても、僅少のものを頼む考がなくてはならぬ。

(10) 良習慣を作ることの注意

古から一日温めて十日冷やすといふことをいふ。學校ばかりで大騒ぎやつても、家庭で注意せねば良習慣は養成出來ない。學校へ出る時間の一定歸路時間の一定飲食衣類の適當及び整理等は一定良習慣を作る必要があるので、學校で口を酸くして習慣の大切なることを話して聞かせても、家に歸ると、忽ち家庭に於ける惡しき習慣を見聞す

る、時間のことなどは何とも思はぬ家庭、飲食衣服のだらしなき家庭の有様を見聞するときは、子供は其の方へ傾き易いものであるから、學校の仕事は家庭に於て打ち壞はされるといふことになる家庭に於ては或は職業によりて、子供と歩調を一にするものの出來ぬ場合もあらう、併し子供が其の職業に關係せぬ以上は、子供にだけでも良習慣を付けさせることの出來ぬ筈はない。要するに父兄の心掛け一つによることで、十分努力して貰ひたいものである。

(11) 父兄の言語のこと

言語は其の人の意思を發表し終つて人品の高下に關係する大切なことであるから、習慣養成の上にも最も大切な關係がある、父兄は一層習慣の大切なることを知つて、子供の前では謹慎の態度に出でねばならぬ。子供は父兄の寫真といふから、子供の言語は家庭の言語に同化されてゐるのである中には學校の感化を受けるところもある。私の學校のやうなところはさうである、一般の父兄は子供の標準手本となる言語を用ゐぬ、子供をウヌと

呼んで、子供が親をウマといふ實例もある。馬鹿野郎、畜生、餓鬼などは下等社會によく聞くところであるが、これが子供の手本となつてはたまらぬではないか。どんな暮しをして居ても立派な言語を遣つて差向がない、立派な紳士令嬢でも野卑な言語を使ふのは邊で見よくないものである。

書に親むの習慣

(村山文子)

流石に喧しき車の轍の音も聞えずなつた夜は早や一時半、二時に近い、これまで机に對つて居た妻は何を爲たらう、物の本など机上に開かれてあるけれど、夫は遂に讀まなかつた、今夜書ねばならぬものも遂に一行も出来なかつた、开して此深更まで……實は唯黙然として座つて居たのである、何うかして書に親むの習慣を作りたいと思ふけれど、幾歲かの間潔々として身も心も定まらなかつた妻の餘りに永く書に遠つて居たので、今急に改めやうとしても仲々に骨が折れる、寂然として獨り座して居ればありし昔の事共思ひ出られて胸苦しく、幸に書を繕くとしても僅に一時二時にして心疲れ氣倦んで了う、思々としていけれど仕方がない、只之から心掛て新しい習慣を作て行く外はないのです、けれど今妾は手藝に専らなる所の女學生方の中には亦書に遠からんとして居る御方が幾人かありはしないかと思はれて急に注意たいと思ひかするのです。

教育上の所感

女高師 教授 藤井利譽

元來未熟なる上長らく田舎に居りし爲め都會の事物教育の事に就いては何等の知識がない然るに此會で何か話せよとの事につき實はお断りしたいのであるが私の話が皆様の利益にはならんでもお近づきになるの機を得たのであるからお話する事にした次第である。
田舎者が俄に東京に出て何もわからず轉任早く平素の業務も多忙であるから何か感じた事があつてもとりまとめる時間も少く何らの秩序も利益もない話である
フレージャー會はかねて聞き及んで居たが如何なる會か實際の有様も知らず又幼稚園といふことについて専心に研究した事もないからそれ等に關してのお話はする事が出来なから地方にての觀察上京後の所感など別に演題も設けずひきまとめて述べて見やう、